

## 目を向けるべきは コロナではなくオリンピック

—— 昨今、政府が入国規制を緩和させたこともあり、外国人観光客が増加していますが、コロナ禍を経て観光に求められることは変化したのでしょうか。

三重野 大前提として、私は「観光を考えるときにコロナを意識しない方が良い」という意見を持っています。理由は海外では日本のように、まだ国民全員マスク時代です。ところが、パリでは、マスクをしている人はほとんどおらず、皆が自由に街を楽しんでいる。実際に現地の人々に話を聞いてもコロナは過去のものとして捉えており、日本との違いに驚きました。パリに限らず、テレビなどで海外の様子が映ったとき、マスクをしている人がいないことに気づいた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。確かに、コロナは生活様式やビジネス面で影響をもたらしたのは事実です。しかし、日本人ほどには、海外の人はコロナ禍の影響に意識を寄せていないことも事実です。

観光に求めるものも、何かが変わったわけではありません。例えば、コロナ禍を経てアドベンチャーリズムと言われるような、大自然を満喫する観光スタイルのニーズが高まったとも言われていますが、これはコロナ前からあったニーズであり、コロナ禍を経たから生まれたわけではないのです。

—— 日本人はコロナを意識しがちですが、外国人が旅行先として日本、ひいては東京を選ぶきっかけが他にあったということでしょうか。

三重野 東京における観光政策を考えるとき、目を向けるべきはコロナではなく、むしろ東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下東京2020大会）ではないかというのが、私の意見です。

近年、なぜオリンピックの開催都市が発展途上の都市ではなく、先進国の都市に戻っているのかといえば、その都市をリブランディング、つまり都市の魅力や訴求力を復活させる

## 誰のための観光か

東京大学公共政策大学院  
交通・観光政策研究ユニット  
特任准教授

### 三重野真代

コロナ禍を経て増加している外国人観光客。東京はどのようにその需要を取り込み、観光地としての価値を高めていくべきか。京都市にて、観光客の量より質への転換を図り、消費増につなげた実績を持つ三重野氏に、東京に求められる観光のあり方を聞く。

コロナ禍による影響を意識していないからです。

昨年9月、研究視察でフランスのパリを訪れました。昨年の9月といえば、日本では、帰国のためだと認識しています。オリンピックが開催されることによって、競技風景だけではなく、その都市の魅力が世界中に発信され、世界中の人がその魅力を再認識し、訪れるようになる。オリンピックは最大級のシティプロモーションの役割を果たしているのです。

実際、東京2020大会の開催中、世界中で日本や東京の魅力が発信されており、「東京に行きたい」と感じた外国人観光客が今、集まってきているのです。一方で地域によっては十分な準備ができておらず、多言語の案内がなかったり、ガイドが不足していたりと課題が出ています。そうこうしているうちに、ラグビーワールドカップや次のオリンピックが開催され、世界の注目は別の都市へと移っていくでしょう。今、この絶好の機会です。受入体制を整備しないことは、非常に勿体ないと考えます。

### 観光が持つ本来の役割

—— 東京観光に訪れる外国人観光客は、東京のどのようなところに魅力を感じているのでしょうか。

三重野 東京都が訪日外国人観光客に対して実施したアンケートによると、「東京に来て何をするか？」という問いに対して、1位が「日本食を楽しむ」、2位が「日用雑貨などのショッピング」、3位が「高層ビルなどの探索」が挙げられました。注目したいのが「高層ビル」で、東京ほど多くのビルが寄せ集まり、スカイスクレイパー（摩天楼）のような眺めが楽しめる都市はあるようで意外とない。東京は縦に積みあ

特集 | 観光都市としての東京の魅力



がるように都市が形成されており、そういった近未来的なイメージも、外国人観光客は魅力に感じているようです。

—— そういった外国人観光客のニーズを満たすために、必要になってくるのは何でしょうか。

三重野 そもそも、私は「外国人観光客のニーズに寄せるべきなのか？」と疑問に思っています。これはもしかしたら、多くの方が誤解されているかもしれませんが、なぜ観光に取り組みのかといえば、観光客のためではなく、地域のため、地域住民のためです。

離島を例にすればわかりやすいかもしれませんが、なぜ、離島で観光に取り組みのかといえば、観光客に来てもらうことによって、地域の活性化を図ったり、地域の課題解決を図ったりと、そこで住む人々の暮らしを良くするためです。それは東京のような大都市であっても同じであり、観光が東京の課題解決や住民の生活の向上に寄与するものでなくてはならないと考えます。

ですから、外国人観光客を集めたいからと

いって、そのニーズに寄りすぎて、住民の生活が毀損されるようなことがあつてはなりません。いわゆる「オーバーツーリズム」も、観光客へのサービスの質の低下以上に、住民の生活が毀損されてしまう点が問題です。観光客にとって訪れてよしだけでなく、東京都民にとっての住んでよしにもつなげる。それが本来の観光の役割だと思います。

——観光について考えるとき、つい観光客目線で考えがちですが、そうではなく、自分たち基準で考えるべきなのですね。

三重野 もちろん、いわゆる「マーケティング目線」は重要ですが、東京は日本の首都であり、世界的な大都市でもありますから、グローバルスタンダードになっている世界基準には応えていく必要があります。具体的には、サステナビリティ、環境問題への対応、DXの加速などです。ただし、観光単独でできる取組みではないと思います。

### 「自分たちの観光」という意識を

——三重野様は以前、京都市で観光政策に取り組まれていましたが、京都と東京で違いを感じる部分はあるでしょうか。

三重野 私が京都市産業観光局に在籍していたとき、いつも疑問に思っていたのが、「なぜ東京ではオーバーツーリズムが問題にならないのか？」ということでした。京都では、外国人観光客の増加に伴い、電車が混む、タクシーに乗れなくなるなど、様々な課題が出ました。しかし、地域住民に浸透させることが大切だと思えます。

京都の場合、地域住民の理解を得るために、市民新聞などで観光の特集を組み、観光に力を入れることでどのくらい消費額が見込まれるか、税収の何%になるのかなどを数値化してわかりやすく伝えていました。観光による効果を数値化して、地域住民に浸透させることが大切だと思います。

### 東京は取り残されていないか

——一人ひとりが「なぜ観光に取り組むのか」を、理解していくことが大切ですね。

三重野 ただもう一つ、私が懸念しているのが、「今の東京は遅れているという印象を外国人観光客に与えるのではないか？」ということですが、先ほど、東京は首都として都市のグローバルスタンダードに合わせていくことも重要とお話しました。今、その点において、世界の都市から遅れを取っているように感じるのは、

例えば、冒頭にお話したコロナへの意識もそうで、世界は過去のものとして捉えているのに、日本ではそうではない。もう一つは街のあり方で、例えば今、欧米諸国では車は都市の中心部では抑制され、道路は人や自転車やモビリティが優先されるというように、都市空間の再配分が進んでいます。その目的は環境、安全、静音化・静謐化<sup>せいてい</sup>化などにあり、そうして人々の暮らしを良くすることが、持続可能な都市としてスタンダードになりつつある。それらが当たり前になっている外国人からは、「遅れている」という印象になりかねないと思うのです。

し、東京ではそこまで珍しい光景ではありませんが、なぜ、東京と京都でこのような差が生じるのか疑問だったのです。

その要因の一つは、物理的なものだと考えています。東京には常に他地域から人が集まっており、地下鉄などの鉄道網が整備され、混雑を前提とした整備がなされていること、そしてある程度ゾーニング（各地域が用途別に区画されていること）がされていることです。東京の大きな特徴は、大手の不動産会社や開発事業者が、観光客向けの大規模な施設を建設していることにあります。通常は地元の人やスモールビジネスを起こして、それらの集合体が観光になることが多いのですが、東京の場合、大きな資本が観光の形をつくり、観光客がそこに集まっていく。そのため、外国人観光客が増えたと行って、地域住民の生活に影響を与えることが少ないのです。

もう一つ考えられるのが、文化的な要因です。京都の場合、伝統文化や寺社仏閣などの守るべき歴史文化が多くあり、それらを毀損されたくないという意識も強いのに対して、古いものから新しいものまでありとあらゆるものが集まり変化し続けている東京は、むしろ率先的に変化を起こしたい街と言えるかもしれません。

——ということは、東京の観光政策には特に課題がないということでしょうか。

三重野 外国人観光客の数は増加していますし、実際に経済効果も発生しているため、失敗しているという印象は抱きません。ただ、これから先を見据えたときに、地域住民の「自分たちの観光にする」という意識はもっと必要に

先述したように、観光はその地域のためのものであり、観光客のニーズに迎合する必要はありません。しかし一方で、日本の首都である東京が世界的な都市の潮流に追いついていないという印象は、日本全体の印象という観点でも好ましくないのでは、と感じています。

——そういった遅れは、なぜ生まれてしまうのでしょうか。

三重野 日本全体がここ数年コロナ禍により鎖国状態で、日本人が海外の様子を見ていないことが大きいと感じています。その間に海外では意識の面で前に進んでしまい、都市としてのあり方に差が開いている。私たち自身ももっと外に目を向けて、世界は今どのような意識を持っているのか、都市はどのように進化しているのか、まず体感することが大切であると思います。

——首都高としては、どのようなことに目を向けるべきでしょうか。

三重野 首都高は、移動の面で重要なインフラであり、重層的な道路は観光資源としても貴重なものですが、グローバルスタンダードに合わせるべきところは合わせていく必要があると感じます。

例えば、EVがもっと走れる環境を整備し、騒音等の環境負荷を軽減できれば、東京でもこれまででは見えてこなかった自然の魅力を発掘できるでしょうし、新しいコミュニケーションのスペースもつくりやすくなるでしょう。日本橋区間の地下化はまさにそういった発想のもと取り組まれていることだと思いますが、さらに広げていっていただきたいと思っています。

なっていくと思います。今は、大規模観光施設に集客していれば良いかもしれませんが、これから外国人観光客がさらに増えていけば、今まで足を向けなかった地域にまでエリアは広がっていくはずですが。そうしたときに、外国人観光客に自分たちの街を楽しんでもらって、それを誇りに思えるような循環が必要になっていくでしょう。

——その意識を持てるようにするにはどのような工夫が必要でしょうか。

三重野 まずは、地域住民にとって観光が有益であることの広報が必要だと思います。例えば、

### 特集 | 観光都市としての東京の魅力



また、レンタカーを活用し、より多様な場所をダイレクトに訪問する、あるいは日本でのドライブを楽しむ外国人観光客はこれから増えていくと考えます。そうした方々にも円滑かつ安全に高速道路を利用してもらうために、運転前・運転中の多言語での情報提供や非常時の案内など様々な観点での環境整備が必要だと思います。

先述したように、そこに住んでいる人々の暮らしの質を高める持続可能な都市のあり方が、今グローバルスタンダードになっています。観光政策は都市政策の総和です。住む人の暮らしの質を高める観光のあり方を模索することは、都市のあり方の模索にも通じ、それはすなわち「住んでよし訪れてよし」の観光の原点にもつながるアプローチだと思います。



みえの・まよ / 大分県出身。京都大学経済学部卒業。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) 都市政策学修士。2003年国土交通省に入省、公共交通、観光、地域政策担当を経て、2014年京都市産業観光局観光MICE推進室MICE戦略推進担当部長、2017年国土交通省総合政策局環境政策課課長補佐、2019年復興庁企画官を歴任。2021年より現職。